みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

コメント＆リプライ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長谷, 千代子, 謝, 沫華 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008869

塚田誠之編『西南中国少数民族の文化資源の“いま”』
国立民族学博物館調査報告　109:93-96(2013)

コメント&リプライ

長谷　今、ご発表を大変おもしろくうかがいました。まず、雲南省の文化多様性の保護の現状について、マクロな観点からわかりやすい概要を教えていただいたと思います。ご発表をうかがってまず思ったのは、文化を語ることの難しさということです。謝先生のおっしゃるとおり、文化にはそれぞれに多様な個性があって、一方ではある程度のブロックや系統に分けられる面もあるけれども、一方では開放的でもあり混交的でもあります。

実は日本文化についても、ある程度同じことが起こります。例えば、ある時は「私たち日本人はさまざまな宗教に寛容だ」と言ってみたり、「外国のよい文化を柔軟に取り入れるのが得意だ」などと言います。また、ある場合には、手のひらを返すように、「島国だから私たちの文化は閉鎖的だ」と言ってみたり、「日本文化は日本人にしか理解できないぐらい独特だ」と言ってみたりします。要するに文化というのは、語られる時の状況に応じて何とでも語られる面を持っていると思います。ということは、もう少し具体的なレベルに話題を限定しなければ、文化について建設的な議論は難しいのではないかと感じました。

その意味で、私がかなり重要な問題の１つだと思っているのは、農耕や牧畜など、直接その民族の生活や生存の基盤にかかわっている生業文化です。先生もご指摘なさったとおり、雲南の文化的多元性を根底から揺るがしているのは、社会経済の変化とか経済のグローバル化、商品経済と言われるものが、かつてない規模で浸透していることだと思います。

例えば、私が主な調査地としていた徳宏州というところで、こういうことがありました。私は、イネの収穫の時にあるタイ族の家を訪問したのですが、その時に彼らは、ヘットガンということをしていました。ヘットガンとは、労働交換のことです。例えばある人が自分の田んぼの稲刈りをする時、お金を使って人手を雇うのではなくて、親戚に手伝ってもらいます。手伝ってもらったお礼は、夕御飯でもてなす程度で、今度は別の日に、その人の田んぼの稲刈りを自分が手伝いに行きます。このようにすると、金銭の授受は必要ありません。その家のタイ族のおじさんは、「このような労働交換はタイ族のうるわしい伝統なのだ」と私に語りました。

しかし現在、山地区域に住んでいるより貧しい人々を安く雇って収穫を済ませるというのが、そのタイ族の村ではより一般的です。そのような変化が起こっているからこそ、おじさんは、そういう風潮に抗議して、本当のタイ族はこうなんだ、本当の生活文化はこうなんだと主張せずにはいられなかったのだと思われます。

私の目から見ても、この助け合いの精神に基づく労働交換は、確かによい伝統文化だ

と思いますし、社会主義精神文明にもかなう行為であると思います。しかし、彼らがすでに他人を雇えるぐらい現金収入を得ていて、山地に住むより貧しい人が、さらにそこから現金収入を得られるという状況もあるわけで、これを一概に否定することもできません。

これは、とても難しい問題です。つまり、文化の多様性を保護することと伝統的な生業文化を近代化することをどう折り合いをつけるのかという問題です。この意味で、私たちは、一体何のために、どの程度まで、どのように文化の多様性を保護するのか、また現実的に保護できるのかどうかということを考えなければならないと思います。

ここで私なりに問題を整理します。研究者や博物館の関係者として私たちが今論じようとしている問題は、他者の文化をいかに保護するかという問題です。保護の方法としては、２つ考えられます。１つは、生きられている状態のまま残すこと。もう１つは、もう生きられないけれども、標本や記録として残すことです。標本や記録として残す場合については、可能な限り残す努力をすればいいわけで、その意味では問題はさほど大きくないと思います。

問題は、他者の文化を生きたままで残そうとする場合です。私たち自身が彼らに代わってその文化を学んで実践するというなら別ですけれども、そうでないのなら、どうしても他者を動かして、彼らにその文化を残させることになります。そこから私たちと他者との人間関係や権力関係にからむいろんな問題が派生することが考えられます。強制的に文化を守らせるというのではなく、自発的にしてもらうにはどうすればいいのか。文化の多様性の保護の重要性をどうやって本人たちに理解してもらうか。また、私たちとしては、文化保護のために資金がいるとしたら、それをどう確保するかといった問題です。

こういう問題意識に基づいて、いくつか具体的な問題について質問したいと思います。

まず１つ目は、民族文化生態村について。この村の伝統的な生業文化は、どのように保護され、維持される計画になっているのでしょうか。この村の人々は主に農業をしているように見受けますが、これはどのような農業なんでしょうか。自給自足的なのでしょうか。昔ながらの稲作をすることになっているのか、それとも稲作をやめて商品作物に切り換えてもいいのでしょうか。農薬やトラクターを使っていいのでしょうか。

これは確認ですが、生態村というのは、入場料をやはり払うんですよね。そのような形で現金収入が増えたら、よその村から人手を雇ってきて農業をやってもらうということもできるのでしょうか。彼らの手にする現金収入は、農業によるものと観光によるものとどちらが多いのか、どちらを主とするように計画されているのでしょうか。

次に、活態博物館のことですが、これは生態村とどの点が違うのかについて、できれば少し具体的にその方針についておうかがいしたいと思います。具体的にその村の人々はどういう生活をすることになる計画なのかについて、おうかがいしたいと思います。

もう１つは、民族文化伝習館についてですが、これは無形文化保護に着目し尽力した組織であるということで、これがつぶれてしまったのは非常に残念だと思います。理想主義的に過ぎたと批判されていましたが、それは具体的にどういうことだったのでしょうか。経済的に運営が困難になったということですが、研究機関や国が経済的に支援するという話はなかったのでしょうか。また、その後、具体的にこの伝習館の志を継ぐような構想はないのでしょうか。

最後に、少し抽象的ですけれども、貧困という概念についてどう考えていけばいいのか、質問したいと思います。

貧困は伝統文化の保護と開発を阻害しているとレジュメでも書いてあったと思うんですが、伝統文化というのは、そもそも今のように商品経済が発達する以前の金銭的には貧しい社会状況の中で、それに適応してつくりあげられたものではないのかなと思うわけです。もともとそんなにお金のいらない状況なのではないか。現在の都市住民の視点から見れば、伝統的な生活様式のほとんどが貧しいと見えるのは、ある意味、当然のことのように思われます。

そもそも私たちが伝統的な生活様式の中に見出す美徳の１つは、まさにその貧しさと表裏一体の部分もあるのではないでしょうか。つまり、私たちが「貧困」の一言で片づけてしまう生活様式の中には、近代文明のように資源を大量消費しない、質素な伝統文化と言えるようなものもあるかもしれません。近代文明とその文化の中にどっぷりつかった私たちは、そういう面での文化の多様性をちゃんと認め切れずに、「貧困」と言って済ませてしまっているだけなのかもしれません。私たちは、一体そういう生活様式を残したいと思っているのでしょうか。それとも本当は残したくないのでしょうか。

このような点については、私自身考えがまとまっておりませんし、この議論が非常に抽象的すぎるということも自覚しております。しかし、伝統文化と貧困の関係について、謝先生が何か思うことがあれば教えていただきたいと思いますし、また中国の民族学会の中でこういう問題について論じられていることがあれば、教えていただければと思います。以上です。

謝　長谷さんからご質問の１つ目について、活態博物館は、私たちが考えたものです。これと生態博物館との関係は、ほとんど同じです。生態博物館は、その村に因習的な倫理的なものをつくる。そして、その村全体を守るということですね。

活態博物館というのは、雲南の民族の人数の比較的少ないところ、例えば今年は徳昂族。まず、その村に代表性がなければならない。彼らは、電気や現代的なエネルギーを意識的に使うことができます。機織機とか伝統的なものは、彼らが保存できるように私たちはサポートします。政府は、彼らに一定の資金援助を行います。今までのものを保存させていくわけですね。それを私たちは「記憶」と言いますが、昔ながらの生活ができ

るような資金の援助をいたします。例えば村の住宅を改築する場合、できるだけ雲南のもとの形を残しながら、中では近代的な生活ができるようにしていくという考え方です。

また、長谷さんからご質問がありました伝習館ですが、伝習館は大切なものだと思います。しかし、なぜ理想化しすぎていると言ったかといいますと、伝習館は、北京から雲南までの民間の最も優秀な歌舞団の人たちを、都市や郊外の閉鎖的なところへ連れてきて、そこで伝習しようとした。文化を選んで、みんなにそれを直接リクエストしてもらう。そして歌う、踊る。しかし、これはあくまでもカンパによるものです。政府の資金援助もありません。魚は水を離れてほかへ行くと、なかなか生き残ることはできません。歴史的な文化の背景を離れて活動することは大変です。

非常に優秀な人たちですが、資金がないということと、最初は非常に新鮮に思うのですが、時間が長くなるとホームシックにかかり、家族に会いたくなり、家に帰りたくなる。 100パーセント閉鎖的なところでそういう活動を続けるということは、私は無理だと思います。ですから、結局、流産してしまいました。

民族民間伝習館を設立した田豊さんの業績は、いろんな意味で貢献は大きかったと思います。今、雲南省の民族文化が世界に出ている。そのPRは田さんがたくさんなさったわけです。例えば楊麗萍という舞踊家ですが、彼女もやはり雲南の印象をつくられました。非常に有名な民間の芸能です。それも田さんが選ばれたものです。ですから、彼は雲南に対して非常に大きな貢献をしてくださったと思います。しかし、彼の背景を離れて雲南にやってきて、閉鎖的なところで生活をなさり、文芸活動をなさったということは、やはり難しいのではないかと思います。

さらにもう１つ、貧困という概念ですが、少し狭いものから見てみましょう。私の言う「貧困」、これはお金だけではありません。大切なことは、経済あるいは教育を受けるという意味での条件です。雲南省は、いろんな気候があります。例えば山の少数民族の生存条件は、非常に厳しいものがあります。彼らは、経済的な条件のよいところに住んでいる人たちに比べたら、物質的に貧しいと言わざるを得ません。でも、彼らは、自分たちの心の文明、精神の文明を持っています。そういう意味で心の豊かな人たちです。ですから、こういう面から見れば、先ほど長谷さんもおっしゃいましたように、徳宏州のタイ族の労働交換、お互いに助け合う、今の雇用の問題、これらが密接にかかわると私も思います。

経済的には貧しい。あるいは生存条件が厳しい。社会も国も支援をしなければなりません。彼らに物質的な生活を提供し、彼らの生活を改善しなければなりません。しかし、彼らが自分たちの文化、自分たちの文明を守るという意味では、彼らの文化、文明を尊重しなければなりません。強制的に彼らに「ああしろ」「こうしろ」ということは言えません。こう言っては矛盾があるとは思いますが、要するにバランスをとらなければならないと思います。